復員兵を受け入れ始めたエリート大学

――『高等教育クロニクル』の記事より――

宮　田　　実（訳）

Veterans Tell Elite Colleges: ‘We Belong’

―― An Article from *The Chronicle of Higher Education* ――

Translated by MIYATA Minoru

デイヴィッドとブラウン大学

デイヴィッド・サルソーンが数年前アメリカ海軍を辞めて，2008年に成立した新復員兵援護法（the Post-9/11 GI Bill）で大学に行こうと思った時，彼の上司は「どこの大学に行こうって言うんだ？ハーヴァードか？」とあざ笑うように言った。海軍では地位の低いデイヴィッドは何も答えなかったが，心の中では「たぶん，ハーヴァードと同じぐらいいい大学にね。」と思っていた。

デイヴィッドは高校卒業後すぐに海軍に入隊し6年間勤めた後，故郷のロングアイランドに戻った。家族の中で大学に進学した者は一人もいなかった。彼はエリート大学へ進学するという希望を持っていたが，それは簡単なことではないということはわかっていた。新復員兵援護法を利用して大学を目指す元下士官にとって地元のコミュニティカレッジか，通信課程の大学か，せいぜい地元の州立大学に行くというのが一般的な考えである。学費が高く，軍に対して好意的でないエリート大学には行けないと思われている。現在アイヴィリーグに所属している超エリート大学であるブラウン大学に通う女性復員兵が元空軍仲間に彼女がブラウン大学に入学したと言った時，彼らは冗談で「そんな大学に行ったら唾を吐かれるぞ」と言った。彼女は「そのようなエリート大学は軍が大嫌いだとみんな

平成25年3月13日　原稿受理
大阪産業大学　教養部

思ってるんですよ」と言う。

新復員兵援護法を利用して私立大学に進学する者の割合は16％にすぎない。しかし，超難関のエリート大学に入学する復員兵の数は更に少ない。例えばアイヴィリーグのペンシルヴァニア大学で38名，コーネル大学で22名，プリンストン大学では１名である。これらの大学では新復員兵援護法のもとでどれぐらいの規模で復員兵を入学させるべきかを検討している。

第二次世界大戦後，アメリカの高等教育の大衆化を目的とした旧復員兵援護法（1944年発効）で約200万人の復員兵が大学に進学した。その内，半数以上が私立大学に進学した。『タイム』誌は「政府がイェール大学に行かせてあげると言っているのになぜ片田舎の無名の大学に行くの？」と問いかけた。大学の中には復員兵学生が過半数を占めたところもあった。もちろん当時は今とは時代が違っていた。兵士の数が現在に比べてはるかに多かった。また，大学進学率は今よりはるかに低かった。現在，復員兵大学生の割合は学部生全体の約３％にすぎない。

何十年も前，エリート大学における復員兵の居場所について考えた大学人がいた。1940年代，自身第一次世界大戦に従軍した経験のあったハーヴァード大学のコナント学長は「復員兵援護法によって戦争世代の能力の低い者たちが高等教育機関に押し寄せることになる」と警告した。彼は後にその発言を撤回し，その法案を絶賛した。しかし，今なお「復員兵の居場所はどこなんだ？」という問いは無くならない。

ダートマス大学の名誉学長で，『戦場で戦った兵士たち：アメリカの戦争と戦場で戦った人々の歴史』の著者でもあるジェームズ・ライト氏は，特にアイヴィリーグの大学が復員兵を積極的に受け入れようとしないことに失望している。彼は「エリート大学は復員兵を他の優秀な志願者と同じように扱うべきです」と言う。新復員兵援護法と黄色いリボンプログラムを組み合わせることによって復員兵は自分の行きたい一流の大学への進学を実現させることができる。ライト氏は更に「できるだけその門戸を広げるべきです」と主張する。17歳で海兵隊に入った歴史学者のライト氏は，年に数回ワシントンD.C.近くの軍病院を訪れ，そこの兵士たちに大学進学を勧め，彼らに高い目標を持つよう激励する。

デイヴィッドにエリート大学への進学を勧めたのは彼のガールフレンドであった。ハーヴァード大学の卒業生である彼女はアイヴィリーグの大学を勧めた。デイヴィッドは彼女によく「そんなエリート大学に行くのはどんな人なんだろう。少なくとも僕には無理だよ」と言っていた。しかし，彼は真剣にエリート大学への進学について考え始めた。そして，2009年，デイヴィッドはアイヴィリーグのブラウン大学に入学したのである。彼は黄色いリボンプログラムを利用して同大学に入学した最初の学生である。黄色いリボンプログラ

ムは新復員兵援護法が提供する資金を超える分の学費を大学と連邦政府が共同で負担するというものである。このプログラムによって復員兵たちの私立大学への進学も可能になったのである。しかし，このようなプログラムは大学進学を目指す元下士官クラスにはなかなか浸透していない。多くの復員兵はエリート大学は費用が掛かり過ぎると考え，初めから選択肢から外すのである。

ブラウン大学でデイヴィッドは同大学の理事に対して，政府と大学の奨学金で進学できるということを才能ある復員兵にもっとアピールするよう働きかけた。エリート大学の中には，コミュニティカレッジや成績優秀者を特定できる非営利団体や軍事施設での説明会などを通じてより多くの復員兵を受け入れようとしているところもある。特に，コロンビア大学はこれまで何百人もの復員兵を教養学部に受け入れている。

大学のキャンパスでは兵役に対する態度が変わりつつある。アイヴィリーグ校の中には予備役将校訓練部隊（学生が将来，軍の将校になるための訓練を受けるところで，ヴィエトナム戦争以来禁止している大学もある）を復活させたところもある。リベラルアーツ大学の中には近隣の士官学校と提携しているところもある。例えば，ヴァッサー大学はニューヨーク州ウェストポイントにある陸軍士官学校と，コロラド大学は空軍士官学校と，そして，セントジョンズ大学はメリーランド州アナポリスにある海軍士官学校とそれぞれ提携を結び，交流を図っている。

現在28歳になるデイヴィッドがブラウン大学に入学した時，同大学の復員兵は彼を含めて３人いた。彼が2012年12月に経済学の学位を取得して卒業した時，その数は６人に増えていた。彼は在学中ボート部に所属し，投資銀行でインターンシップを経験し，リーダーシップ賞を受賞した。彼は次のように言う。「復員兵たちは大学に価値ある物の見方，考え方をもたらします。でもブラウン大学に実際に入学する復員兵はわずかです。私の場合は，知り合いがこの大学が選択肢の１つであり，しかも入学できる可能性があると言ってくれたから志願したのです。」

絶好のチャンス

2012年の秋にデイヴィッドは海軍時代の友人トロイから電話をもらった。トロイは海軍にいた時準学士号を取得しており2012年に除隊した。彼はデイヴィッドがブラウン大学で経済学を学んでいると聞き感銘を受け，彼もアイヴィリーグの大学に行きたくなったのである。現在29歳で，海軍に９年間在籍したトロイは学士号の取得を考えている。彼は訪れたカリフォルニア大学バークレー校で何人かの優秀で高い目標を持っている復員兵に出会い考えが変わったと言う。エリート大学への進学を夢見るトロイは現在，ブラウン大学と

コロンビア大学に志願している。そして将来，大学院はバークレー校を考えている。彼は次のように言う。「私は新復員兵援護法という絶好のチャンスを生かしてコミュニティカレッジで無駄な時間を過ごすよりエリート大学でしっかり勉強したいのです。」

新復員兵援護法を利用してこれまで817,000人の復員兵が大学に入学した。大学の経営者の中にはエリート大学の方が一般の大学より優秀な志願者を発掘するのが上手だと考える者がいる。2009年に退役軍人省が黄色いリボンプログラムを発表した時，数多くの大学が復員兵に対するサポートを表明してこれに参加した。ところが，多くのエリート大学では予期しないことが起こった。復員兵の志願者が極端に少なかったのである。

ブラウン大学の入学選考事務局のミラー局長は同大学がこれまであまり積極的に復員兵を受け入れる努力をしてこなかったことを認めている。2012年10月，デイヴィッドは理事や教職員や学生団体と共に大学当局に対して復員兵の募集に関する長文の意見書を提出した。その意見書では入学者選考，奨学金，学生支援サービスに関する27の提言が行われた。例えば，黄色いリボンプログラムの大学分担金の増額が求められている。ブラウン大学では現在，復員兵学生１名に対して年間１万ドルが援助されているが，この金額は退役軍人省が認める最高金額よりも5000ドル少ない。また，この意見書は軍事ネットワークへの広報強化も求めている。さらに，認知されるのに十分な復員兵学生の数を確保することが大学の優先課題であることも指摘している。

他のエリート大学も新復員兵世代に対してこれまでに増して関心を示しているようである。すべてのアイヴィリーグの大学やその他のエリートリベラルアーツ大学が優秀な海兵隊員を発掘するために海兵隊リーダー奨学金制度に加入した。イェール大学は最近，復員兵学生がスムーズに大学生活に移行できるようなプロジェクトを始めた。そして，ハーヴァード大学は2012年に復員兵学生に対して初めてオリエンテーションを実施した。ファウスト学長はその場で「皆さんはハーヴァードの未来だけでなく，世界の未来を創るんですよ」と述べた。

現在ハーヴァード大学３年生で海兵隊で朝鮮語の通訳だったトラヴィスは大学が復員兵獲得のために努力していることを歓迎している。ハーヴァード大学に在籍する復員兵学生をサポートする非営利団体の代表を務めるトラヴィスは軍事用語について大学の理事に説明を求められると言う。ハーヴァード大学は現在３名の復員兵を受け入れている。数は公表されていないが，ハーヴァードエクステンションスクールではもっと多くの復員兵が学んでいる。

復員兵の居場所

もっと積極的に復員兵を受け入れるべきだという大学のリーダーがいる。ヴァッサー大学のキャサリン・ヒル学長は次のように述べる。「今から40年前，低所得家庭のアフリカ系アメリカ人学生を受け入れる大学は存在していたのです。しかし，そのような学生はこちらから積極的に働きかけないといけないんです。」2012年，彼女は，成績優秀で低所得家庭の子弟が大学に行けるよう手助けするポス財団に，復員兵とエリートリベラルアーツ大学との橋渡しを要請した。同財団はその要請に同意した。そして，ヴァッサー大学は11人の復員兵学生を受け入れた。ヒル学長は他の大学が復員兵に対する固定観念を捨てて，もっと復員兵のことをよく理解して，学生として受け入れてほしいと思っている。

ブラウン大学では復員兵学生たちは彼らがもたらした学生の多様性は人種の多様性と同様，大学にとって価値あるものであると主張する。デイヴィッドが大学進学を考えている復員兵仲間と話す時，最後の決め台詞は「大学こそが君にふさわしい場所なんだよ（You belong here.）」である。この考えが一般学生たちの共感を得た。そのような学生の１人であるドロシー・ルッツはブラウン大学で学ぶ復員兵に関するドキュメンタリーを制作した。そして，そのタイトルとしてデイヴィッドの台詞を採用したのである。

デイヴィッドは３年前この台詞を実感した時のことを覚えている。ブラウン大学に入学してすぐに彼は初めて大学のキャンパスをじっくり観察した。威厳のある校舎群，背の高い木々などまさに彼が想像していたものであった。しかし，同時に彼には１つの疑問があった。この大学と彼の軍人としての過去になんらかの関連性があるのだろうかという疑問が。キャンパスを歩いていると印象的なものが目に入った。レストランや喫茶店が立ち並ぶセイヤー通り沿いにあるリンカーンフィールドの端からアーチが伸びていた。近づいてみるとそのアーチの中心のところに大きく羽を広げた鷲の彫刻があり，その下に「世界大戦で自由のために命をささげたブラウン大学人を讃えて」ということばが刻まれていた。それを見た時，ブラウン大学のキャンパスはデイヴィッドにとって居心地のいい場所になった。彼はそこにブラウン大学の軍隊の伝統を感じた。海軍を辞めて以来かなりの年数がたち，新しいキャリアを始めようとしている今日でも彼が「僕のアーチ」と呼ぶそのモニュメントを見るたびに彼は心を動かされる。

コロンビア大学の場合

1947年に数十万人の第二次世界大戦からの復員兵が全国の大学に入学した時，コロンビア大学は復員兵を受け入れるためにエクステンションプログラムを再編して教養学部を創設した。今日，イラクやアフガニスタンでの紛争が沈静化するにつれてコロンビア大学の

教養学部はアイヴィリーグ志向の復員兵の主要な選択肢となっている。2012年に復員兵援護法の支援を受けてコロンビア大学に入学した復員兵は271人にのぼる。この数字は他のアイヴィリーグの大学に在籍するすべての復員兵を合わせた数の約３倍である。同大学の復員兵学生数は新復員兵援護法が発効する前の2008年に比べると約４倍に増加した。

教養学部学生選考部のロジャーズ部長は「新復員兵援護法はエリート私立大学への進学の際にこれまで最も大きな障害と思われていた学費の問題を克服したのです」と述べる。同学部での学生選考のプロセスは年齢の高い非伝統的学生に対するものが採用されており，学業成績だけでなくこれまでの人生経験が考慮される。しかし，いったん入学すると他の一般学生と同じ授業を受け，専攻分野を決めることになる。

優秀な復員兵を探す方策はいろいろ試みられている。ロジャーズ氏によれば，最近まで軍事施設での説明会が主要な方法であった。このような説明会は今でも実施されているが，優秀な学生を他のアイヴィリーグの大学へ進学させるための海兵隊リーダー奨学金プログラムを通して探すことが多い。コミュニティカレッジの学業成績優秀者からなる栄誉学生団体も学習意欲のある復員兵を探す重要な場となっている。

ロジャーズ氏は優秀な復員兵を獲得する方法をすべて明らかにしようとしないが，口コミと個人的なつながりが重要であると言う。多くの復員兵は軍ではコロンビア大学のパンフレットを見たことがないし説明会にも参加したことがないと言うが，復員兵の中には，優秀な復員兵がコロンビア大学に入学したという噂を聞いた者もいる。海兵隊で軍事ジャーナリストだったカリムは数年前ニューヨークで取材中にロジャーズ氏にインタビューをしたことがある。しかし，すぐに二人の立場は逆転した。ロジャーズ氏がカリムに彼の生い立ちや将来の目標について質問したのである。そして，ロジャーズ氏はカリムに，除隊したらコロンビア大学を志願するよう勧めた。カリムはそのアドバイスを聞いていたがすぐに行動に移さなかった。マイアミの低所得者の居住地域に住んでいたカリムは高校時代勉強が大嫌いだった。17歳の時，GPA（成績評価平均値）が0.96で高校を中退し，海兵隊に入隊した。しかし，彼は読書家だった。彼は２年間，駐留した沖縄の兵舎の図書館の本を読みまくった。船上ではみんなが娯楽映画に興じている時，カリムはユングやプラトンの作品を読んでいた。2008年にカリムは除隊したが，自分のしたい職を得ることができなかった。そして，学校に対する反感は次第に薄れていった。彼は１年間カリフォルニア州にあるコミュニティカレッジで学び，大いに成長した。そして，2010年に彼はコロンビア大学の教養学部に志願した。その時，ロジャーズ氏にインタビューをしてから３年が経過していた。現在27歳でコロンビア大学で哲学を専攻しているカリムは次のように述べる。「私はコロンビア大学が提供するプログラムに親しみを感じました。大学が目指す目標と

私の目標が同じだということが解ったのです。即ち，これまでコロンビア大学のようなエリート大学で学ぶなんて考えられなかった人たちにその機会を与えるという精神に感動したのです。」

（2013年１月11日号）

（Copyright 2013. *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission.）

訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はリビー・サンダー氏である。

今回の記事は前回の記事（「人生を変えた新復員兵援護法」大阪産業大学論集　人文・社会科学編　16）の続編である。前回登場したロンは米政府の黄色いリボンプログラムを利用して私立大学で学んだ。しかしこのようなケースは珍しく，ほとんどの復員兵は地元の州立大学やコミュニティカレッジに進学するのである。今回登場するデイヴィッドは私立大学の中でも難関のエリート大学であるブラウン大学に進学した。

新復員兵援護法を利用して大学進学を果たした復員兵学生の数は80万人を超えている。エリート大学も復員兵の受け入れを徐々に増やしている。中でも最も積極的に受け入れているのがコロンビア大学である。エリート大学へ入学する復員兵が増えることは，将来大学進学を考えている兵士たちに大きな希望を与えることになる。アメリカでは，やる気があって，大きな目標に向かって精進する者にはアメリカンドリームを手に入れるチャンスがあるといえよう。今後さらなるアメリカ政府と高等教育機関のふところの広さと柔軟性に期待したい。